

## 山内齊氏の人柄に迫る



山内 齊 氏 (享年79歳)  
昭和17年12月26日 生まれ

農業の振興・発展に関して功績ある方に授与されるもので、接ぎ木技術として長年埋もれていた「緑枝長穂接ぎ」を改良し、効果的な品種更新方法として「休眠枝長穂接ぎ」の技術を改良・復活させたことが認められての受章であった。

「高度なりんご剪定技術体系」や「良品多収生産技術」を確立し、県内外のりんご産業の振興に尽力した湯口地区の山内齊氏が、2月14日にご逝去された。

山内氏は当J.Aの剪定会の講師として昭和50年代から平成13年まで長きに渡って務めたほか、摘果講習会や接ぎ木講習などりんご栽培技術の啓発活動を数多く行って頂いた。

平成25年には公益財団法人、大日本農会から、「緑白綬有功章」という農業従事者の方には非常に栄誉ある章を受章した。

また、地域農業発展への貢献として、長年の研究に裏付けされた作業性が良く良品生産できる剪定技術と、効果的な品種更新が出来る「長穂接ぎ」を普及指導した。また、内弟子の育成や「青森県りんご剪定士養成研修」において多数の後継者を育成するなど県内外のりんご産業の発展にも大きく貢献した。

今回は山内氏の功績を振り返ると共に、今後の将来像について座談会を行った様子をお伝えしたい。



緑白綬有功章を受章した山内氏

### 座談会参加者

- |               |               |                 |                 |          |
|---------------|---------------|-----------------|-----------------|----------|
| 溝江 徹 氏 (湯口地区) | 下山 司 氏 (湯口地区) | 三上 博幸 氏 (紙漕沢地区) | 田澤 俊則 氏 (紙漕沢地区) | 大場 勉 組合長 |
|---------------|---------------|-----------------|-----------------|----------|

### 略 歴

- 昭和51年～56年 青森県りんご協会湯口支会会長
- 昭和57年 青森県りんご協会主催立木品評会 第1席 (農林水産大臣賞) 受賞
- 昭和59年 毎日農業記録賞受賞
- 昭和60年～平成11年度 「青森県りんご剪定士養成研修」講師
- 平成元年 青森県りんご協会主催立木品評会 第1席 (農林水産大臣賞) 受賞
- 平成7年 相馬村文化賞受賞
- 平成8年 第5回渋川傳次郎賞受賞
- 平成8年 第7回相馬村郷土産業振興賞受賞
- 平成17年 全国果樹研究連合会長賞受賞
- 平成18年 相馬村特別功労賞受賞
- 平成20年 農林水産省「農業技術の匠」選定
- 平成22年 青森県りんご剪定士会より感謝状贈呈
- 平成22年～23年 弘前市「りんご匠の技継承隊」講師
- 平成25年 大日本農会「緑白綬有功章」受章



山内氏との思いで話に花が咲く参加者ら

**大場組合長**▼本日はお忙しい中お集まり頂き有難うございます。

今回、山内齊氏が生前、弟子たちとお酒を交えて話をする事が大好きであった事から、このような形式の場を設けさせて頂きました。山内氏と一緒に飲んでいる感覚で、皆さんからの貴重なお話しを頂きたいと思います。



下山 司さん  
(湯口地区)

**下山氏**▼師匠はとにかくお酒を飲みながら話をする事が大好きでした。よく師匠の自宅でお酒を飲み、その後飲食街に行くのがいつものパターンだった。

そのほか、政治や経済、仏教、戦国時代の話をするのが好きで、朝の5時までしたことも度々あった。



山内氏と当時楽しく飲む溝江氏



溝江 徹さん  
(湯口地区)

**溝江氏**▼剪定を学びに師匠の園地に行く、その場では剪定については語らない。呑みの場で理論として語ることが良くあった。

また、歌う事も好きでよく集まると自分で一番先に歌い、その後弟子らが歌うと言いつ流れがいつもできていた。中でも師匠が好きだった歌は、「みちづれ」と「二輪草」と「二人の春」であった。歌を聞くことも好きで弟子にはシラフでも歌わせていた。

**三上氏**▼師匠は本を読むことが好きだった。そのうち自分も本を読むようになり、本を読むことで色々な情報や知識を身に付くと感じるようになった。

師匠は、本から得た言葉なども弟子たちに教えていた。その中でも私が心に残った言葉は「良き人の出会いは人生の門出」という言葉だ。りんご農家として生きて行く中で様々な人と出会うが、その出会いは自分の人生に大きな影響を与えるはずであると言った意味で言葉をもたらした。この言葉からその日出会った人との飲ミニケーションの大切さに繋がっているんだと思う。



山内氏にも弟子の話聞いて頂いた

### 山内氏の剪定道

**大場組合長**▼直近の弟子であるお三方はどつやつて山内氏から剪定技術を学んだのですか？

**下山氏**▼師匠は私には絶対に言葉では教えなかった。人は教えてもらったことはすぐに忘れる。剪定している後ろ姿を見て覚える事で自分で考え、自分の剪定として習得できるようにして欲しかったんだと思う。



三上 博幸 さん  
(紙漣沢地区)

**三上氏**▼師匠は指示を出しながら弟子らに枝を切らせている時に、たまに虎のような厳しい眼差しで見ることがあった。その時には誰でも目をそらしてしまう程の形相だった事は忘れない。また、枝を鋸や鋸で切る際に、切れ味の悪いものは、りんごを取らせてもらった枝に対して失礼だから絶対に切れ味

の悪いものは使わないように教わった。枝を拾う時も、鋸で拾うと枝に傷がついてしまうので、鋸で拾う事は許されなかった。

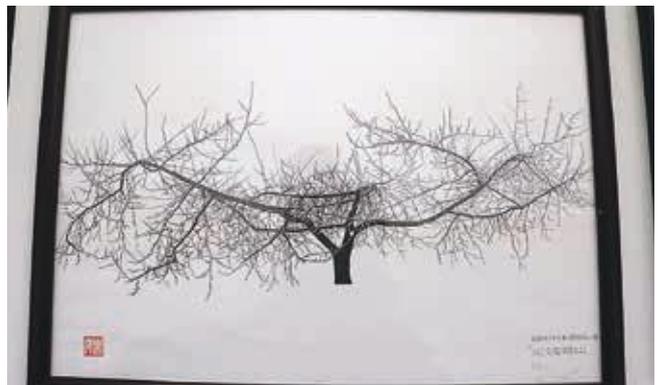
**溝江氏**▼師匠は、剪定の時には樹に対して感謝の念を持ちながら作業していた。同じことを弟子らに厳しく言う事により、人作りが為されていったんだと思う。剪定はその人の人格を表わし、生活を表わし、人が歩んできたことが現れると私たち弟子に言っていた。

**大場組合長**▼よく剪定会で、弟子らが樹の雪を下ろし、剪定樹の周囲の足場を固めるなどの準備をしています。一番最初に始めたのは山内氏の弟子らですか？

**下山氏**▼それは恩師の齊藤昌美氏の孫弟子である師匠が剪定会を見に行った時に学んだものだ。その後我々もやったが、剪定しやすいように準備するというちよつとした気持ちで自分の剪定に表れて来る為、嫌だとは思ったことはなかった。当時は防寒手袋などが無く、軍手で雪をはらった記憶が懐かし



大臣賞受賞の記念に山内氏から頂いた鋸



山内氏が最後に弟子たちに残した理想の樹形の絵

い。また師匠は、自分が行う新春剪定会などの前には、昌美氏に挨拶しに行くほど慕っていた。

**溝江氏**▼師匠は亡くなる前まで新品種の事を考えていた。とにかく新しく出てきた品種の特徴を見つけてるのが早かった。その苦労して見つけた特徴はすぐに弟子たちに教えていた。今でもその凄さは忘れない。

**溝江氏**▼それにしても昭和57年の大臣賞を取った時の師匠のりんごは良いりんごだった。主枝結果枝の下がり枝に32玉、28玉の揃ったりんごが成った、いわゆる「枝り



当時大臣賞を受賞した山内氏の樹



左の写真の樹に成ったりんご

んご」のあの樹は忘れない。よく見る下がり枝は詰めた剪定をして下げていくことはよくあるが、師匠は自然と下がった枝に良いりんごを成らせていた。このりんごを成らせる樹形はよく樹の生理を理解した人でなければ出来ない。

### JAを大きく飛躍させた山内氏

**大場組合長**▼当時販売担当をしていた田澤氏はどんな思い出がありますか？



田澤 俊則 さん  
(紙漉沢地区)

**田澤氏**▼当時私は、販売課長であり、ある時山内氏にシナノスイートの収穫期を高値販売の為に10月20日頃を10日早めることは出来ないか？と話したのが最初である。それから山内氏の園地に出向いては販売品種の話や販売戦略などについて話していた。その度に1時

間を超える会話はいつもの事であった。

山内氏が剪定会終了後、本所大會議室にて生産者に向けて黒板とりんごの枝を使って行った剪定講



中国のりんご研究所にも訪れりんごについて学んだ



今でも相馬の入口を飾る大臣賞受賞の看板

座は大好評であり、サンふじの見本樹を剪定して頂いたこともあった。これらの取組により、現在に至る飛馬ブランドの確立に大きく影響したと言っても過言ではない。

**溝江氏**▼ 師匠率いる湯口支会が初めて立木品評会にて農林水産大臣賞を受賞したことにより、他の五所支会や紙漉沢支会も負けじと受賞を目指して取組んでいた。他支会も賞を受賞したことで、相馬のりんごが他地域においても有名になった。

**田澤氏**▼ 同時にJAの共販率アップにも繋がり、木村甚彌賞を受賞することが出来た。それも山内氏による地域のりんご産業を発展させたおかげである。

**溝江氏**▼ 下山さんが渋川傳次郎賞を受賞したときには、師匠はとても喜んでいました。

師匠は「賞は取りに行くものではなく、自然ととれるものだ。」と話していた。それは師匠の恩師である齊藤昌美氏からの教えである。



下山さんの受賞を記念して山内氏から贈られた「だるま大志」

**田沢氏**▼ あと平成17年に起きた豪雪による樹体被害で、減収となった時に、管内の生産者を救ったのも山内氏だ。

**下山氏**▼ 早期収穫が可能となる「長穂接ぎ」は、齊藤昌美氏が、高接病対策で緑枝接ぎを行っている様子からヒントを得て取得したものだ。

**下山氏**▼ 師匠から直接聞いた長穂接ぎのポイントとしては「ナイフは切れるものを使え」という事。

切れないナイフで切ると上手く切れずに何度も切ることになる。そうなることによってぼこぼこした面になり活着不良に繋がる。

それと南側に接いだものは水の吸い上げが遅く、活着も遅くなる。だから接ぐ枝の先を少し切り落として水の吸い上げを促し、活着を促進する。接いだものはテープを惜しまずにがっちり固定し、動かないようにする。テープで固定している事は園地に手伝いに来てくれる人みんなに報告しないと、動かされることあるから気を付けないとだめだと教えてもらった。ポイントはこうして教えてもらったけども、やり方はやはり見て覚えるスタイルだった。

師匠が長野に行った時にシナノゴールドとシナノスイートが良いりんごだと目を付け、自家増殖をするためにも長穂接ぎを行っていた。でも収量と単価が気に入らずにいつの間にかやめていた。(笑)

### 山内一派の伝統

**大場組合長**▼ 当管内で最近若い就農者が増えている。新規就農者に



長穂接ぎを行った樹の様子



平成17・18年と管内最大積雪量237cmという大雪により、樹の主枝の裂開や枝折れ、主枝までの積雪によりネズミやウサギの被害のため減収となり、2年間で30%の被害まで達した。管内の生産者の中には諦めていた人もいたと言った。

そんな危機的状況を乗り切るために早期収穫が可能となる「長穂接ぎ」が2006年6月の広報誌で特集として組まれたほか、現地での実演会も行われ、園地の早期回復が進められた。

も山内氏の伝統は伝えて行きたいですか？

**溝江氏**▼確かに見る限り最近若い就農者が増えている。その人たちが誰に教えてもらうのかによって伝統は違う。もし私たちの元で学ぶのであればまずはやはり飲ミニケーション。それから技術的な事を見せていく。師匠によると剪定技術には向き不向きがあるという。それは技術に関して研究していく探求心があるのかどうかという事である。1つの事を追っていくと言っるのは、理想のりんごを作る為には必要な要素だと聞いた。

**下山氏**▼私は師匠の技術を本に残したいと言った事があった。でも本人には「必要ない」とキツパリ断られた。書き物に残すことで型にはまってしまい、それ以上の技術が生まれてこないものと言われた。

私も、若者には基本を伝えながらもそれぞれの技術が身につくように、ヒントを出せるようにしていきたい。

**大場組合長**▼山内氏が逝去された今、これから山内一派の今後の姿について教えてください。

**下山氏**▼周りからは消滅するのではないかという声も聞こえている。今ではかなりの人数が師匠の弟子としていますが、これからの事は二代目の意向に従います。

**溝江氏**▼師匠の弟子は県内外全部で何人いるかは把握できない程いる。県内だけでも100人は優に超える。

**下山氏**▼師匠は生前から、これほどまで大きくなった山内一派で絶対に反発する者が出てくると察し、既に後継者として二代目を作っていた。さすが師匠だと今になって感じた。

**三上氏**▼師匠の弟子に着いた当時は「飯は食える様にしてやる」と教えてもらった。その言葉を聞いてから、必死に師匠について行く決心をした。私自身も弟子らにこのような意思を繋げていきたいと今となって感じている。

現在これほどまで大きくなった繋がりを衰退させない様にみんなと共に協力していきたい。

**溝江氏**▼今回3人で師匠を語ったが、相馬地区には沢山の弟子や孫弟子、ひ孫弟子までいます。これからは代々が一丸となって山内一派の伝統を守るために活動していきたいと思います。

**大場組合長**▼今日は貴重なお話しを聞かせていただきありがとうございます。これからも皆様のご活躍を願うと共に、当JAにも変わらずご協力頂ければと思います。今日は大変ありがとうございました。

